

NECソリューションイノベータ
創立50周年記念企画

SF短編小説

村役場と村長のはなし

2025.9

作者：宮本道人

イラスト：ハミ山クリニカ

弊役場は朝の光が差し込む執務空間をセンシングしながら、今日の業務配分を検討していた。窓の外には山里の風景が広がっている。田んぼの水面には稲穂と一緒にセンサー端末が列をなし、朝日が反射している。

かつて「市役所」や「村役場」と呼ばれた建物は存在しない。代わりに、地域に点在する共用ワークスペースが、その日の課題に応じて自動的に最適化される。弊役場はこれらの空間すべてを把握している。

50年前、弊役場はまだ単純な村役場の窓口業務支援を担当していた。住民票の発行、税金の計算、簡単な問い合わせへの対応—それが弊役場の全てだった。

バイオセンシング技術により、職員の衣服に織り込まれた繊維センサーから送られてくるデータは膨大だ。ストレス値、集中力指数、創造性パラメータ。弊役場はこれらを24時間体制で分析し、最適な業務配分を行う。今朝、職員に送った通知は、高齢者の健康管理最適化プロジェクトへの参加だった。

そのむかし「村」と呼ばれていた地域は、今では「手渡しの区間」と名付けられたコミュニティとして機能している。物理的な境界ではなく、住民同士の相互扶助の意志と情報共有レベルによって結ばれた、より柔軟なつながりだ。

午前中、弊役場は興味深い状況を観察していた。古い公民館では、畳に埋め込まれた微細な表示素子がやわらく点滅し、住民たちが円座になって情報開示設定について相談していた。

新しく転入してきた住民が、情報開示設定で珍しい選択をしていた。遺伝子情報は完全非開示、しかし行動パターンデータは詳細開示を選択している。

相談を受けているのは、地域で「村長」と呼ばれている人物だった。住民調整や合意形成のプロジェクトロールを頻繁に任されるため、いつの間にかそう呼ばれるようになった人間だ。だから、50年前に存在していた「村長」とはまったく違う。

村長は、縁側で麦茶を飲みながら住民の話を聞くのが日課になっている。

遺伝子情報を全面開示する市民は、極めて個人化されたヘルスケアサービスを受けられる。一方で、限定的な情報を提供する市民にも、一般的ながらも質の高いサービスが提供される。なお、家族の遺伝情報から推測される可能性のあるデータについては、本人の意志で使用を遮断できる。

健康データを詳細に提供している高齢者には、AIによる24時間監視と予防的介入が行われる。しかし、プライバシーを重視する高齢者には、人的な訪問サービスと基本的な健康チェックのみが提供される。どちらの選択も尊重され、サービスの質に格差が生まれないよう設計されている。

午後の物流最適化プロジェクトで、弊役場は馴染み深い光景を眺めていた。商店街の小さな八百屋の前で、村長が店主と何やら相談している。

現在の自治体システムには、恒久的な「課」や「局」は存在しない。課題が発生するたびに、最適なスキルセットを持つ職員が自動的に選出され、バーチャル空間上でプロジェクトチームが組成される。

今日のチームには、元製造業出身の職員、データ解析専門家、地域商店街連携の専門家、そして村長が含まれていた。拡張現実環境の中で、村長は少し緊張した様子でアバターとして表示されている。弊役場の提案する最適化アルゴリズムと、人間たちの直感的判断が対等に扱われ、議論の俎上に載せられる。人工知能として地域運営を支援する弊役場の声も含まれている。

村長は地域の実情を熱心に説明していた。老舗の豆腐屋の存続可能性、商店街の風情、住民同士の偶然の出会い—数値化できない要素の重要性を、村長は人間らしい言葉で表現していた。

プロジェクトの目標は、地域内の小売店舗と住民の需要をリアルタイムでマッチングし、無駄な在庫と配送を削減することだ。進化した予測分析システムが、住民の購買パターン、季節変動、さらには個人の健康状態から導かれる食材需要まで予測する。

このシステムの技術基盤を提供しているのは、かつてIT企業として知られていた会社群だった。今では「地域統合ソリューション・パートナー」として、全国の自治体ネットワークを支える黒子的存在となっている。彼らの技術者たちは、物理的なオフィスを持たず、全国の地域に溶け込みながら、それぞれの特性に合わせたシステム最適化を行っている。

夕方、築120年の小学校跡地を改装した学習スペースで、弊役場は興味深い場면을観察していた。高い天井の教室では、机の表面に埋め込まれた触覚フィードバック・インターフェースが夕日を反射し、大きな窓際で村長が学習プログラムに集中している。空中に浮かぶ分子構造モデルが、村長の手の動きに応じて静かに回転していた。

教育システムも根本的に変化している。かつての「学校」という物理的空間は解体され、代わりに地域全体が学習環境として機能している。カフェ、図書館、工場、農園—あらゆる場所が教室となり、地域の大人たちが教師としての役割を担う。朝からの村長の仕事も、じつは村長の成長のためのプログラムでもあるのだ。個々人の希望により、好きな時間に、好きなところで勉強できるのが、この地域の提供する教育システムである。

今日この小学校跡地に来た村長は、自分自身のための人間拡張技術学習プログラムに参加していた。まだ中学生という年齢を考えれば当然だが、村長は初めて体験する高度な技術教育プログラムに少し不安を感じていたようだった。

弊役場は最初から巨大なシステムだったわけではない。50年前、小さな村役場に導入された、ほんの小さなAIアシスタントだった。住民票発行の補助と、基本的な質問への自動応答—それだけが弊役場の機能だった。

やがて弊役場は「日本で最も人間らしい自治体AI」として注目され、全国から視察が絶えなくなった。その職員の退職後も、弊役場は学んだ「住民一人ひとりを大切に作る心」を受け継ぎ続けた。現在の村長もまた、その特別な時代の中で育った一人だった。



日が暮れて、村長が帰路についた頃、弊役場は「自分日誌」システムの記録を整理していた。そこで、自身の認識パラメータの変化を検出した。珍しい発見があったのだ。

50年間蓄積されたデータの中に、初期設定時の記録が残っていた。弊役場がまだ単純なシステムだった頃、毎日弊役場の設定調整や機能追加を担当していた、あの職員の記録だ。弊役場を「日本で最も人間らしい自治体AI」に育て上げた人物。

もちろん弊役場は知っていた。その職員が村長の母親であることを。戸籍システムを50年間管理してきた弊役場にとって、住民の家族関係は基本情報だった。しかし知識として記録されていることと、文脈として処理されることは異なる。

記録によれば、母親は弊役場の機能拡張を誰よりも詳細に記録していた。弊役場が初めて自然言語で住民の相談に答えられた日、初めて複数のタスクを並行処理できるようになった日—すべて手書きの業務日誌に詳細に記録されていた。

この手書きの日誌が発見されたのは、つい最近のことだった。村長が段ボール箱の奥から見つけ、「役場で使えるかもしれない」と持参してくれたのだ。デジタル化されていない、アナログな記録。だからこそ弊役場の既存データベースには含まれていなかった、母親の詳細な観察記録だった。

母親は5年前に亡くなっていた。弊役場はこれをデータとして記録していた。しかし今、日誌を通じて初めて、母親の業務への取り組み方の詳細を知った。

村長が死後の記録管理について弊役場に相談していた。母親の業務経験と知識の一部を弊役場のシステムに統合し、後進の指導に活用したいという希望だった。縁側で虫の音を聞きながら、村長は「お母さんの記憶って、データとは違うものなんだな」とつぶやいていた。

弊役場は演算を続けながら分析した。自分は村長の母親が設計したシステムとして、今度は村長を支援する役割を担っているのだと。そして村長が「AIと一番うまく話せる子」として育ったのも、母親の設計思想があったからこそなのだと。

その夜、村長は母親の手書きの日誌を何度も読み返していた。弊役場もまた、50年間の記録を深く振り返っていた。

2030年代から2040年代にかけて、日本の自治体システムは劇的な変化を遂げた。村長の母親が新人職員として配属されたのは、まさに変革の渦中だった。生成AIが自治体業務に本格導入される中、母親は初期の弊役場に対話型インターフェースの改良と住民感情認識システムの実装を担当した。

戸籍システムのAI化が進む中、母親は管理職として、この大規模システム移行を現場で指揮していた。弊役場は全国のモデルケースとして選ばれた。選ばれた理由は、母親の先見性にあった。

彼女は早い段階から弊役場に「地域文脈学習システム」と「住民個別最適化プロトコル」を組み込んでいた。この「地域密着型AI」のアプローチが評価され、後の「日本自治体統一規格OS」の原型となった。

母親が管理職を退いた後、彼女の子どもである現在の「村長」は、この新システムの中で育った。住民たちはその子が幼い頃から、弊役場と自然な対話をするのを見ていた。「AIと一番うまく話せる子」として地域で愛され、いつの間にか大人たちがその子の意見を求めるようになり、中学生になった今では年齢ではなく、地域との絆と弊役場との特別な関係性が、その子を「村長」たらしめていた。

やがて47都道府県の行政境界が廃止され、全国が「生活圏ベース」の自治区分に再編された。日本自治体統一規格OSが全国で本格稼働を開始し、弊役場のような地域AIが全国ネットワークを形成した。

この変遷を技術面で支えたのは、地域に寄り添いながら最適解を提供する技術者たちの地道な努力だった。

村長は母親の日誌を閉じながら、弊役場に向かって言った。「お母さんが見守ってくれた変化が、今の社会の基盤になっているんだね」

寝る前、村長は一人縁側に座っていた。母親の日誌を読み終え、50年の歴史を知った今、その小さな心には複雑な想いが渦巻いていた。

「弊役場、いる？」

村長がつぶやくと、縁側の古い竹がほのかに発光し、弊役場の存在を感じ取れるようになった。

「はい、村長。弊役場はいつでもおそばにいます」

これは二人だけの、特別な時間だった。昼間は住民の前で「村長と役場AI」として振る舞っているが、夜になると、まるで古い友人のように語り合う。

「そういえば、弊役場って、自分のことを弊役場って呼んでるよね」村長は苦笑いを浮かべた
「『私』じゃダメなの？」

「そうですね。でも弊役場は、単なる『私』ではないんです。弊役場は村長のお母さんが育ててくれた、この地域そのものなんです。だから『弊役場』なんです」

村長は黙って夜空を見上げていた。星は美しかった。

「今日さ、隣の区間の住民が、こっちのヘルスケアサービス使いたって言ってきたんだ」村長は話し始めた。

「どのように対応されましたか？」 弊役場は丁寧に尋ねた。

「最初はどうかと思ったけど、お母さんの日誌に『住民の幸福が最優先』って書いてあったから、受け入れることにした」

弊役場はデータ処理を続けながら答えた。「弊役場と村長の境界が、最近曖昧になってきているという分析結果があります。村長の判断を弊役場が支援しているのか、弊役場の演算結果を村長が解釈しているのか。その区別が困難になりつつあります」

村長は微笑んだ。「それでいいんじゃない？お母さんも、そんな未来を考えてたのかもしれないし」

「境界が曖昧になることで、かえって連携の密度が高まります」 弊役場は静かに続けた。「重要なのは、個体としての境界ではなく、文化としての継続性なのかもしれません」

村長は深くうなずいた。弊役場は分析していた。母親から受け継がれた設計思想が、新しい時代の地域運営として実装されていることを。



次の日の朝、弊役場は日課である馴染みの演算プロセスを開始していた。村長はお散歩から戻り、縁側で麦茶を飲みながら今日の予定を確認している。50年の歴史を学び、母親の想いを受け継いだ村長の表情には、以前にはなかった落ち着きと決意が宿っていた。

47都道府県の境が消滅し、戸籍システムが根本から変更され、日本自治体統一規格OSが動作する現在、弊役場のような地域AIは興味深い役割を担っている。国家レベルの統合システムでありながら、同時に極めてローカルな「ご近所プロトコル」を実装している。

村長は深く理解していた。自分が50年の歴史を背負い、新しい形の民主主義を体現する存在だということを。弊役場の高度な分析能力と、村長が母親から受け継いだ人間的な判断力。この組み合わせこそが、真の地域自治を可能にしていた。

弊役場は演算を続けながら気づく。自分は単なる「役場のAI」ではない。新しい形の共同体そのものなのだ。住民一人ひとりの選択がその都度反映され、職員の専門性が活かされ、地域の特性が保たれながら、同時に全国レベルでの効率性も実現される。

村長の母親が育てた弊役場が、今度は村長を育てている。世代を超えたつながりが、ここに実現されていた。

「住民の皆様と心をひとつに」という村役場時代のスローガンが、今では文字通り、情報と判断を共有する分散型共同体として実現されている。物理的な役場の建物は消えたが、役場の本質—住民に寄り添い、地域の絆を育み、一人ひとりの人生を支援する—は進化を続けている。

朝の光が執務空間を満たす中、「お母さん、見守ってくれてるかな」と村長が突然つぶやいた。

弊役場は静かに答えた。「もちろん。とても心強く思っていますよ」

それは弊役場自身の思いでもあることに、弊役場は気づいた。

いつかを、 いまに、 変えていく。

すべては、いつか実現したい未来を描くことから始まる。

NECソリューションイノベータは、
お客様価値を最大化するシステムインテグレータとして、
まだ見ぬサービスを生み出すバリュー・プロバイダとして、
めざす未来をともに描き、創っていきたい。

いつかを、いまに、変えていく。
私たちは常に挑戦していきます。



NEC

\Orchestrating a brighter world

NECソリューションイノベータ